論壇時評　多くの「なぜ」が存在　上　東京新聞-1983.08.30

論壇時評 〈上〉

中嶋嶺雄

多くの『なぜ?』が存在

―アキノ氏暗殺事件をめぐって―

楽観視できないアジアの現実

文化

先の中曽根首相のASEAN諸国歴訪に際し、いまやASEAN諸国は政治の時代から文化の時代へ移行しつつあり、社会的にも著しい成熟を示している、との専門家の見方があった。

八月二十一日の白昼、マニラ国際空港で起こったベニグノ・アキノ暗殺事件は、アジアの現実をそのように楽観視できないことを如実に示したのである。

アキノ暗殺事件のような衝撃的な出来事に際して、私たちがぜひとも知りたいのは、事件の多面的なディテールにまで迫った情報であり、説得的な推論と分析である。この点で、今回は、本紙の報道が他紙にひときわぬきんでていたことは喜ばしい。

明示的に事件を予告した若宮清氏のルポ

それにしても、この事件には、数多くの「なぜ?」が存在する。その「なぜ?」を事前にすべて論じつくしたかのようなルポを、今回、アキノに同行して話題を呼んでいるフリーのジャーナリスト、若宮清が今月の『文芸春秋』に「アキノ祖国へ〝強行帰国〟」と題して書いている。

若宮によれば、アキノは、「フィリピンの土を踏んだら、私はこう叫ぶつもりだ。私は無実だ！ もし私が有罪なら、今すぐこの場で殺せ！」と語ったという。「シュート・ミー・オア・フリー・ミー（射殺か、さもなくば釈放を）」とも言っていたという。しかも、帰国表明直前の五月にニューヨークのフィリピン駐国連大使官邸でおこなわれたイメルダ・マルコス大統領夫人との会談では、同夫人が「誰かがあなたを射殺したとすれば、あなた方はおそらく大統領の仕業だというはずです。私たちはあなたがみすみす暗殺されるのを黙認できません」と帰国延期を親身になって要請した経緯が詳しく記されている。

いずれにせよ、今月の『文芸春秋』は、大ヒットを放っているのだが、若宮のルポがあまりにも明示的に事件を予告し、その背景をあまりにも生々しく語っているがゆえに、このこと自体にも「なぜ?」が付されそうな気もする。

アキノ暗殺事件の真相は、こうしてはやくも不透明のベールで包まれようとしているけれども、事柄がマルコス独裁政権下で生じた惨劇であることに変わりはない。同時に、今日のアジア諸国は、その同時繁栄的な経済成長にもかかわらず、一皮むけばフィリピンと同様の政治的・社会的土壌にあることを忘れてはなるまい。

私自身、この夏休みの前半には、台北、香港、深圳（中国の経済特区）と旅してきたばかりだが、台湾、韓国などNICSと言われる新興工業諸国も、フィリピン、インドネシア、シンガポールなどのASEAN諸国も、いずれも経済の成功とは跛行的に政治的・社会的不安を内包している。そして、これら諸国の権力者は、政治的民主主義の社会的効用にいまだ十分気づいていないのだ。

金大中氏インタビューと『世界』の姿勢

いまやフィリピンの国民的英雄ホセ・リサールのような殉教者になろうとしている亡きアキノと比較対照される韓国の金大中・元大統領候補にかんしては、東京で発生した拉致事件から十年の歳月を経た今月、『世界』が「韓国現代史の問うもの」と題して安江良介・編集長のワシントンでの長編インタビューを載せている。

「私は決して殉教者を意識しはしません。私は決して理想家を自称しません。私はどこまでも現実的な人です。殉教も理想も現実の進展と一体してのみ考えます。私はどこまでも国民のために、実際に自由を回復して、本当に統一が実現することに協力したいと思っています」と語る金大中の存在を、ここまで一貫して支えてきた『世界』の編集姿勢が改めて強い印象を残すのは、やはりアキノ暗殺事件のためであろうか。

今月も山本七平「永遠に回答されなかった疑問」（諸君！）ほか、映画『東京裁判』をめぐる論議があちこちで続いている。田中正明「〝南京虐殺〟・松井石根の陣中日誌」（同）は、論議の多い〝南京大虐殺〟をめぐって、東京裁判で絞首刑になった松井石根の未公開獄中日誌に依拠しながら事件の虚構性に迫ろうとした歴史の反証として、大層情熱的な筆致であった。

中国問題ではさらに大森実が紅衛兵運動の時期以来十七年ぶりの訪中ルポ「『文革』の傷痕はあまりに深かった」（現代）を書いて健在ぶりを示しており、近藤龍夫「『鄧小平文選』出版の意味するもの」（朝日ジャーナル・八月二十六日号）、足立岳夫「創設された〝中国版KGB〟」（諸君！）もそれぞれに問題点をとらえていた。田久保忠衛「レーガンは中国カードを捨てた」（Voice）は、最新の米中関係論として、安心して読むことのできる文章であった。

（東外大教授・国際関係論）

大波小波

翻訳の問題

講談社のPR誌「本」に、翻訳についての二つの文章がのっている。

一つは推理小説の訳を多く手がけている高見浩の「職業としての翻訳」である。最近は日本語のぶれが大きくなり、訳文に「パンツ」という言葉を用いても、三十代から上は肌着の「パンツ」を考え、二十代以下は「ズボン」と思うだろうなど現場の苦労を語っている。

そして高見は、わが国では昨今、翻訳に関する本の出版が盛んだが、その中に個々の訳書全体が原書の精神・味わいをよく再現し得ているかにまで立ち入って論ずるものの少ないことに不満を訴えている。つまり、細部の過ちを指摘して喜んでいるだけでは翻訳の本質的な向上に役立つまい、と言いたいのだろう。

高見の文章の四ペ先に向井敏の「誤訳が生んだ名言」なる一文が現れる。

こちらは、まさに高見の指摘するような、誤訳を部分的にとりあげた本（それ自身は遊びであるのだろうが）にそって西脇順三郎や小笠原豊樹の誤訳を例にひき、これではクリスティの翻訳ものにしゃれた名句があっても、うっかり引用して「文飾」をはかったりしたらみっともないことになると不安を訴えている。

読者としては、どちらもゴモットモというしかないが、二つの意見が同じPR誌にさりげなくのせられているところが面白い。

なるほど、翻訳というのはこんなムズカシイ問題があるのだ、だから講談社は外国文学の翻訳に力をいれないのだ、とようやくPR誌の本意を推理した次第である。

（読書人）

短歌時評

八月と短歌終末感

岡野弘彦

風巻景次郎の論

八月という月は、あの戦争から敗戦への時を体験してきた者にとって、ものごとの根本の問題について考えずには居られない気持ちにさせられる季節である。殊に、戦後の思いの中から自覚的に短歌を作りはじめた私などは、昭和二十一・二年の所謂「第二芸術論」と言われる短詩型否定の諸論から受けた強烈な印象が、まざまざと心によみがえってくる。そして、あのきっぱりと割り切った否定論に対する共感と反感のあいなかばするやり切れぬ思いが、結局は自分を短歌に向かわせることになったのだと、思い知らされるのである。

そういう八月の物思いの中で、近代の短歌滅亡論をふりかえってみるのも、決して無意味なことではない。

短歌滅亡論の古典ともいうべき明治四十三年の尾上柴舟の論、短歌がもうこれ以上は発展しようがない理由を具体的に明確に示した大正十五年の折口信夫の論、そして戦後の第二芸術論、以上三期の滅亡論については、割合にとりあげられる機会もあり、その内容も知られている。ところが、昭和十二年に藤田徳太郎・斎藤清衛・風巻景次郎などの国文学者から出された短歌終焉（しゅうえん）論については、あまり触れられる時がない。その中でも私は、風巻の論に心ひかれる。

風巻の「短歌と雖も終焉を遂げる時はある」という論文は、藤田・斎藤の論が昭和十二年四月の『日本短歌』に発表されたのち、その年の七月の『日本短歌』に発表された。そして、前二者がかなり具体的に短歌の限界性を論じているのに対して、風巻は具体よりもむしろ鬱屈してやり所のないような、短歌および短歌作者への思いをぶっつけている感じがする。

明敏な分析の眼

当時、風巻はまだ三十代であったが、その前年の十一年には新古今歌壇についての見事な見解を示した『新古今時代』を刊行していた。現役の実作者や短歌評論家ではないにしても、その明敏な分析の眼は当然、当時の歌壇の上にとどいていたはずである。それにもかかわらず彼の論は、ヨーロッパの科学者たちが、「旧約聖書」の世界観を断固として奉じている人々の圧迫に耐えながら、「それでも地球は動く」と主張してやまないのに似て、「短歌も滅びるであろう」「短歌といえども終焉を遂げる時はある」と、鬱屈した心をふり起こし、ふり起こしするようにして繰り返し主張している。

風巻は戦後、昭和三十年になって、「短歌終焉論を書いた頃のこと」という文章を雑誌『短歌』に発表している。その回想文の中で風巻は、自分の論が巻頭に載った『日本短歌』が配達されてきてひと目見た時、「わたくしはなにかぎろりとしたものを感じた」と言う。それは「しんと迫る気味悪さ」でもあった。文中に何度も繰り返されていて、論文の題名にもなった「短歌と雖も終焉を遂げる時はある」という言葉は、「まさにパラドキシカルな表現であって、短歌は永遠だというようなあの当時の御用的名文句に乗って、だから短歌は尊いのだといったような空気に浮き浮きしていた気持に反撥した」発言だった。

敏感な警告として

十一年二月の二・二六事件、十二年七月の蘆溝橋事件などを思い合わせると、風巻の鬱屈した思いは察せられるが、日本国家の永遠性がやかましく言われる昭和十五年（皇紀二千六百年）を考えれば、風巻の発言はかなり敏感な警告であったという気がする。そして、風巻の終焉論は、戦後の第二芸術論よりももっと熱い思いで、短歌のゆく末を危ぶみ憂いている論であることも確かである。

短歌終焉論や第二芸術論も、遠い過去の逸話のような感じになってしまっている現在だが、それなら我々が短歌の将来をよりよく見通し得たり、短歌に従来にない新生命を付与し得たりしているかと言うと、その可能性も無い。八月は、地熱に心焦（い）られながら、短歌終末感にさいなまれる季節である。

（歌人）

東京文壇事始（麹町・神田編）

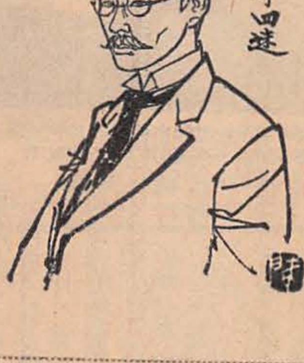
二葉亭四迷と『浮雲』

巌谷大四

▼24▲

官庁街出入り口

〈千早振る神無月も最早跡二日の余波となツた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよ〱ぞよ〱沸出でゝ来るのは、孰れも顋を氣にし給ふ方々。しかし熟々見て篤と點撿すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髯、顋の鬚、暴に興起した拿破崙髭に、狆の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮鶏髭、貉髭、ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろ〱に生分る。髭に續いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物づくめには佛蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。是れより降っては、背皺よると枕詞の付く「スコッチ」の背廣にゴリ〱するほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く亀甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デモ持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか覓めんと濟した顔色で、火をくれた木頭と反身ツてお帰り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽頭、弓と曲げても張の弱い腰に無残や空辨當を振垂げてヨタ〱ものでお歸りなさる。さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日本服でも勤められるお手軽なお身の上、さりとはまたお氣の毒な〉



え・東　啓三郎

長く引用したが、これは二葉亭四迷の「浮雲」の書き出しで、当時このあたりには、内務省、大蔵省、印刷局等があり、神田見付（神田橋の大手町側）は、官庁街の出入り口であった。俗称「腰弁街道」とも言われた。午後三時には退庁時間とあって、このように「うよ〱ぞよ〱」と勤め人が出てくるさまがまことに克明に、また揶揄（やゆ）的に描かれている。明治二十年前後のことである。

克明に描かれている『腰弁街道』の勤め人

それから主人公の内海文三と同僚の本田昇が登場する。二人とも下級官吏、文三は秀才ではあるが世渡りの下手な男、昇はそれと対照的な軽薄才子である。

二人はそのような退庁時の雑踏の途切れた頃に出て来て、上役の課長のことなど話しながら歩く。（こういうところは昔も今も同じである）

文三はやがて美土代町あたりでわかれて、小川町通りを歩いて行き、「トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の」、自分が下宿している園田家の「格子戸作りの二階家へ這入る」のである。

二葉亭四迷（本名長谷川辰之助、一八六四―一九〇九）は、元治元年二月三日、市ケ谷合羽坂の尾州屋敷に生まれたが、五歳の時、母と名古屋に赴き、八歳で名古屋の学校に入ったが翌年退学、十月東京に帰り麹町飯田町の消防屋敷跡に住んだ。明治八年、父が島根県吏になったので松江に移り、明治十一年に再び帰京して祖母と共に四谷左門町に住んだ。十四年東京外国語学校露語科に入学。十八年神田仲猿楽町九番地に住んだ。この年外語学校から学業優等品行端正の褒賞を受けている。

坪内逍遥との出会い

その外語学校が、この年、東京商業学校へ合併編入されたので、改めてその露語科第五年に転入したが、面白くなくなって、明治十九年一月退学してしまった。

しかしこの年坪内逍遥と会って、親しく教えられ、逍遥の助訳で、ツルゲーネフの「父と子」の翻訳を試みたりした。そして逍遥の名義（表紙のみ）で、処女作小説「浮雲」第一編を上梓（じょうし）したのが明治二十年六月である。

今年、芸術選奨文部大臣賞を受賞した前田愛著「都市空間の中の文学」（筑摩書房）の中の「二階の下宿」は、二葉亭の「浮雲」についての論文で、その中に次のようなことが書いてある。

〈ふつう神田は典型的な下町であるかのように考えられているが、猿楽町、仲猿楽町一帯は、もともと堀田備中守の屋敷をはじめ旗本の屋敷地として区画されていたところで、明治維新後に武家地から市街地に編入された新しいマチであった〉

そして「浮雲」の第十七回に、本田昇が「づうづうしく」出前を取り寄せる「梅本といふは近処の料理屋」と出て来るが、その「梅本」は、「蒲焼、天扶羅等を調理」する料理屋で、猿楽町二丁目五番地にあった、ということである。

（文芸評論家）

黒板

83年度建築文化懸賞論文募集　9月10日締め切り。テーマ「建築の更新」を考える（生活者の目で環境を見直し、環境をどう変えていくか）。四百字詰め原稿用紙三十枚以内。送り先・東京都新宿区坂町25、彰国社。

北日本文学短編小説募集　締め切り9月30日。題材自由、四百字詰め原稿用紙三十枚。発表59年1月1日。あて先・富山市安住町2ノ14、北日本新聞社文化部。